自立活動だより ワクワク

令和元年６月１４日
県立指宿養護学校
自立活動部第２号
（担当）津留　誉

令和元年度は，外部の専門家による連携指導を５回計画しています。１回目は，ST（言語聴覚士）の先生においでいただきました。児童生徒の実態に応じて幅広く御指導いただき，有意義な時間となりました。概要を以下にまとめましたのでご覧ください。

１　日　時　令和元年５月 28 日(火)

２　指導者　ＳＴ(言語聴覚士)　鹿児島医療技術専門学校 松尾康弘先生

３　参加者　生活支援センターなんさつ　神村晃大コーディネーター
小学部３人　中学部１人　高等部１人　計５人
担任　自立活動専任

４　主な指導内容について

言葉によるコミュニケーションが難しい子供について

○　言葉掛けだけでなく身振りも添えてコミュニケーションをとるようにする。周りが子供の気持ちを予測し，代弁していくようにする。
○　言葉が出ないようであれば，身振りでのコミュニケーションでもよい。身振りも話し言葉と同じくコミュニケーション手段の１つである。
○　身振りや指差しに周りが言葉を添える（言語化する）ことで言葉が作り上げられ，身に付けていく。発語は身に付けている言葉の一部が表出したものと考える。
○　身振りを言語化する際は，伝わりやすさを考え，幼い言葉を使ってもよい場合がある。
○　指示をする際も言葉だけでなく身振りを加えると伝わりやすい。そのことが一語文での会話につながる。

発音指導について

○　体全体の緊張が弱いと口の周りも不器用な動きになることがある。常に口が開いている子供は口周りが不器用という指標になる。
○　口周りが不器用だと明瞭な発音は難しい。また，口を閉じないと鼻音の発音は難しい。
○　発音については，発音そのものの練習をするのではなく，食事や歌を歌うことを通して行うとよい。食事の際，食べ物をこぼさないように口を閉じる声掛けをする。

発語を増やす取組について

○　音読の際，一音ずつ区切って読んでいる子供は文字と音が一致した段階で，内容の理解はまだ難しいと考える。指導する際は，周りが音をつなげたものを伝える。
○　長い話ができるようになるためには，語彙を増やす取り組みも必要。
○　「しりとり」や「かるた遊び」などの言葉遊びもよい。

５　発音のための構音器官について

日常生活の様々な場面でも発音のための構音器官の運動機能について意識する機会があります。うがいをすることで口や喉を，鼻をかむことで鼻呼吸を意識することができます。子供によっては，日常の呼吸が口呼吸になっている場合があります。ストローで飲み物を飲むことは口を閉じる練習にもなります。